

453 自覚胎動を用いた胎児管理の試み

浜松医大

松山 薫、茂庭将彦、西口富三、金山尚裕、
住本和博、能登裕志、寺尾俊彦

〔目的〕現在実施されている妊婦検診は、妊娠経過中のある時点をとらえて行うものであり、連続的な胎児管理ではない。連続的な胎児管理を行うためには、妊婦自身の参加が必要である。そのために、自覚胎動（胎動表）による胎児管理を実施し、その臨床評価を得たので報告する。

〔方法〕胎動増減の経時変化をビジュアルに把握するためカウント10法による胎動表を作成した。

すなわち、午前9時よりローリング・キッキング様の大きな胎動をカウントし、10回胎動を自覚した時刻をグラフ表示する。また、午後9時になっても胎動数が10回に満たないときは、その胎動回数を記入し、逐日的な胎動変化を容易に把握できるようにした。これを用いて、妊婦51例について臨床評価を行った。

〔成績〕1. 正常妊婦では平均 2.9時間で10回胎動を計測し、比較的短時間で測定が終了することが判明した。また、妊娠週数にともない胎動は漸減する傾向を認めた。2. 2例の胎盤早期剥離例では発症の1週間前より胎動の急激な減少を認め、FHRモニタリング、および超音波診断にて確定、急速遂娩を施行した。3. late deceleration、loss of variability を認めたため帝王切開術を施行した例では、CTG上これらの所見が出現する以前より胎動の急激な減少を認めた。4. 胎動数が少ないため入院の上、FHRモニタリングを行ったが異常所見は認めず、経膈分娩した1例で脳性マヒとなった。

〔結論〕検診と検診の狭間を妊婦自身が胎動を計測することにより、FHRモニタリングとは異なる胎児情報が得られ、より連続的な胎児管理への一つの可能性が示唆された。

454 新たな発想による外測陣痛計の開発

国立療養所稚内病院*，北海道大学医療技術短期
大学部**，札幌エムイー技研***

小國親久*，和田龍彦**，澤野公孝***

〔目的〕現在臨床的には陣痛外測法が汎用され、ガードリング法が基礎となっているが、計測方法など種々の問題が提起されながらも、使い勝手の簡易さが先行して居り、分娩管理に重要な無拘束計測法はまだ不満がある。それは主に、母体体位を一定に拘束することとデータの信頼性が内測陣痛曲線と比べ著しく低いことである。これらの欠陥や問題を解析して外測陣痛計の改善を図り、臨床の実際に資することを目的とした。〔方法〕1) 陣痛発作～間欠迄の腹壁面の多重撮影により計測部位の変動を調べ、2) 妊産婦の体位変換における腹部前後・左右最大径を測り、腹囲の差と形状を比較識別、3) 現在汎用4主要メーカーのトランスジューサ装着ゴムベルトのテンション特性を調べた。〔成績〕1) 陣痛発作による計測部位の変動は上下のみならず前後左右にもみられ、その腹壁面の形は陣痛極期で球面体に識別できた。2) 妊産婦の腹部平均最大径は立位前後径約27.5・左右径約24.5、仰臥位前後径約25.5・左右径約26、右側臥位前後径約28.5・左右径約22、左側臥位前後径約27.5・左右径21.5cmであった。3) 腹部形状は立位で半楕円形、仰臥位で半円形に近く、左右側臥位では最大径が左右中心径よりも低く位置し、立位では左右側臥位面に弛んだ形であった。4) 腹囲平均は立位約82・仰臥位約81・右側臥位約79・左側臥位約77cmで、その差は約5cmであった。5) ゴムベルトのテンションは垂直下10mmの引っ張りでC社約200・N社約250・T社約300・Y社約400gの値を示した。〔結論〕吾々は外測陣痛計の改善・トランスジューサ装着装置一体化に成功し、今後小型軽量化・多チャンネル情報取得・ドプラプローブへの応用など発展を期している。